

## 中間評価論文要旨

青少年の危険行動と規範意識および  
セルフエスティームとの関係

上原千恵\*

## 1. 研究の背景および目的

今日、わが国における児童生徒をめぐって、喫煙、飲酒、薬物乱用、危険な性的行動、自傷行動、不健康な食行動、身体運動の不足など、生命や健康に深刻な影響を及ぼす、いわゆる危険行動の問題が指摘されており<sup>1)</sup>、その防止は学校保健上の重要な課題の一つとなっている。

青少年の危険行動を防止するためには、そうした行動に関わる要因を明らかにすることが不可欠である。欧米においては、知識の伝達にとどまる伝統的な防止教育の限界が明らかになって以来、危険行動に関連する要因として心理社会的要因が重視されるようになった。わが国においても、心理社会的要因は青少年の危険行動に関わる意志決定や行動選択に及ぼす影響が大きく、また危険行動の出現において共通して存在しうるといった考え方から取り組まれた研究が、散見されるようになった。

そうした中で、セルフエスティームの影響に焦点を当てた研究が、欧米を中心として特に注目されている。セルフエスティームとは、一般的には自己に対する肯定的な感情として理解されている。これまで、青少年の喫煙に関しては研究が蓄積され、家庭や学校に関するセルフエスティームの低さがその要因の一つであることがほぼ明らかにされている。飲酒や薬物乱用、危険なダイエット、性的行動、自傷行動などにおいても、家庭や学校、友人といった特定の領域のセルフエスティームがそれらの出現に関係していることが予想される中で、今後はそうした点を明らかにしていくことが望まれる。しかし、これまでに開発された下位領域を有するセルフエスティームの測定尺度は項目数が多く、調査において用いることが難しいという課題が指摘される。

ところで、青少年の危険行動のなかには喫煙や飲酒、薬物乱用、交通安全に関

---

\*筑波大学大学院人間総合科学研究科学校教育学専攻（学校保健学）

する行動など、違法な行動が含まれている。そうした行動に対しては特に、規範意識が主要な要因となることが考えられる。青少年期は、社会や大人の規範に対して反抗しようとする意識が比較的強いとも言われ、規範意識の不安定さが危険行動を助長しうることが懸念される。しかし、こうしたことが指摘されるにもかかわらず、これまでわが国では青少年の規範意識と危険行動との関係はほとんど検討されてこなかった。その一つには、規範意識の測定尺度が極めて乏しいといった課題が存在するからと思われる。

そこで本研究では、青少年の規範意識およびセルフエスティームと危険行動の出現との関係を明らかにし、危険行動の防止における規範意識およびセルフエスティームの重要性について検討することを目的とする。また、その際に用いた友人、家庭、学校、地域等の下位領域を有する規範意識およびセルフエスティームの尺度について、その信頼性および妥当性を検討する。

## 2. 研究方法

調査は、2006年10月に、機縁法により学校長の了承が得られたC県の県立高等学校に在籍する1～3年生445名を対象として、無記名自記式の質問紙法により実施した。回収された調査票444部（回収率99.8%）のうち、属性が不明であった者などを無効回答として除いた435名（男子190名、女子245名）を解析対象とした（有効回答率98.0%）。調査実施者は各クラスの担任教師であり、実施にあたっては、回答者への倫理面への配慮と調査方法の統一を図るために作成された「調査を担当するにあたっての注意事項」および「調査実施手順」に基づいて行うよう依頼した。

調査内容のうち、危険行動、規範意識およびセルフエスティームについては、野津らが2001年に行った全国調査で用いられた日本青少年危険行動調査票における項目を用いた。危険行動については、全59項目の中から、本研究では有酸素運動、朝食摂取、やせ薬、月喫煙、月飲酒、シンナー、性交経験、シートベルト非着用、暴力行為、自殺願望の10項目を取り上げた。規範意識については「友人」、「家庭」、「学校」、「地域」の4つの下位領域を有する規範意識尺度（12項目）を、セルフエスティームについては「全般」、「友人」、「親」、「教師」、「地域の人々」の5つの下位領域を有する自己肯定感尺度（15項目）を、それぞれ用いた。加えて、規範意識尺度および自己肯定感尺度の妥当性の検討には、外的基準として和

田らの規範意識の尺度および桜井の自尊感情尺度日本語版をそれぞれ採用した。

分析方法は、危険行動の出現状況<sup>④</sup>については、性別学年別で集計した。規範意識およびセルフエスティームの状況については、各項目の肯定的回答（「とてもそう思う」と「ややそう思う」の回答の合計、以下同様）の割合を性別学年別で集計した。割合の差の検討には $\chi^2$ 検定を用いた。危険行動の出現と規範意識およびセルフエスティームとの関係については、相関関係および重回帰分析の結果より検討した。その際、各危険行動の出現について好ましくない状況に0点、好ましい状況に1点を、また尺度の各項目の回答について望ましい状況であるほど高得点を与えてそれぞれスコア化した。なお、統計上の有意水準は、すべて5%とした。統計パッケージは、SPSS 11.0J for Windowsを用いた。

### 3. 結果

#### (1) 規範意識尺度および自己肯定感尺度の信頼性および妥当性

信頼性について Cronbach の  $\alpha$  係数による内的一貫性を検討したところ、規範意識尺度では.72～.88を、自己肯定感尺度では.81～.91を、それぞれ示した。妥当性については、規範意識尺度では $r=.24\sim.50$ （すべて $p<.05$ ）を、自己肯定感尺度では $r=.29\sim.67$ （すべて $p<.05$ ）を、それぞれ示した。

#### (2) 本対象における危険行動の状況

有酸素運動を過去7日間に3日以上行った者は男子57.4%、女子43.3%であり、女子が有意に低率であった。また、男女ともに学年が上がるにつれて有意に低率を示した。性交経験者は男子16.8%、女子21.2%であり、女子では学年が上がるにつれて有意に高率を示した。暴力行為を過去12ヶ月間にしたことがあった者は男子23.7%、女子14.3%であり、男子が有意に高率であった。自殺願望が過去12ヶ月間にあった者は、男子18.4%、女子36.7%であり、女子が有意に高率であった。朝食を過去7日間に毎日食べた者は男子60.5%、女子64.5%、ダイエットのために過去30日間にやせ薬を飲んだことがある者は男子1.6%、女子4.5%、月喫煙者は男子12.6%、女子9.8%、月飲酒者は男子29.5%、女子23.7%、シンナー経験者は男子1.1%、女子1.2%、シートベルトをめったにあるいはまったく着用しない者は男子33.7%、女子29.0%であり、いずれも有意の男女差および学年差はみられなかった。

### (3) 規範意識およびセルフエスティームの状況

規範意識尺度の全12項目における肯定的回答の割合をみると、「友人」および「家庭」の領域では、すべての項目で70%以上であった。特に、「友人との約束は守るべきである」は男子95.3%、女子91.8%であった。「地域」の領域では、例えば「国の法律は守るべきである」は男子76.8%、女子76.7%であったが、「どちらともいえない」と回答した者も約17%みられた。一方、「学校」の領域では、「学校の教育方針は尊重すべきである」の肯定的回答は男子48.4%、女子29.4%にとどまった。

自己肯定感尺度の全15項目のうち、男子では14項目、女子では13項目において、肯定的回答は50%以下であった。例えば、「教師」の領域の「私の学校の先生は、私を信頼している」は男子26.3%、女子12.7%、「全般」の領域の「私は自分自身が好きである」は男子28.4%、女子21.2%であった。一方、「親」の領域の「私の親は、私を大切に思っている」は男子55.8%、女子70.2%であった。

### (4) 規範意識と危険行動の出現との関係

危険行動の全10項目の出現について、それぞれ規範意識尺度の4つの下位領域の得点との相関係数を算出したところ、男子では40のうち12において、女子では同様に26において、有意の正の相関係数が示された。具体的には、男子では月喫煙、月飲酒、シンナー、暴力行為、シートベルト非着用について、女子では有酸素運動および朝食摂取を除くすべての危険行動について、「家庭」、「学校」、「地域」に関する規範意識との間で、そうした関係がほぼ示された。女子の朝食摂取は、「家庭」に関する規範意識のみと有意の正の相関係数が示された。なお、男子のシンナーおよび性交経験は、「友人」に関する規範意識との間で有意の負の相関係数が示された。

### (5) セルフエスティームと危険行動の出現との関係

危険行動の全10項目の出現について、それぞれ自己肯定感尺度の5つの下位領域の得点との相関係数を算出したところ、男子では50のうち15において、女子では同様に19において、有意の正の相関係数が示された。具体的には、男子では有酸素運動、やせ薬、月飲酒、シートベルト非着用、自殺願望について、「親」、「教師」、「地域の人々」の領域との間で、そうした関係がほぼ示された。女子では朝食摂取、月喫煙、月飲酒、シンナー、シートベルト非着用、暴力行為、自殺願望について、「友人」、「親」、「教師」、「地域の人々」の領域との間で、そうした関係

がいくつか示された。なお、性交経験は、男女ともにいずれの下位領域においても有意の正の相関係数は示されなかった。

#### (6) 危険行動の出現における規範意識とセルフエスティームの影響に関する相対的な検討

規範意識尺度および自己肯定感尺度を独立変数とし、危険行動の全10項目をそれぞれ従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、規範意識尺度から有意の正の偏相関係数が示されたものは、男子ではやせ薬、月喫煙、月飲酒、暴力行為の4項目、女子ではやせ薬、月喫煙、月飲酒、シンナー、性交経験、シートベルト非着用、暴力行為、自殺願望の8項目であった。自己肯定感尺度から有意の正の偏相関係数が示されたものは、男子ではシートベルト非着用および自殺願望の2項目、女子では朝食摂取および自殺願望の2項目であった。なお、女子の自殺願望は、両尺度から有意の正の偏相関係数が示されたが、自己肯定感尺度の方が規範意識尺度に比べて高値であった。

## 4. 考察

### (1) 規範意識尺度および自己肯定感尺度の有用性

本研究で用いた野津らの規範意識尺度および自己肯定感尺度は、いずれも尺度として十分な信頼性および妥当性を有することが確認された。

規範意識尺度については、これまで信頼性および妥当性が確認されているものが極めて乏しく、貴重と言える。また、本規範意識尺度は、特定の行動に左右されない一般的な規範意識を測定するものであること、友人、家庭、学校、地域の下位領域を有することなど、これまでにみられる尺度とは異なり、規範意識の測定において妥当なものと言える。セルフエスティームの測定尺度に関しては、CoopersmithのSelf-Esteem InventoryやPopeらのFive-Scale Test of Self-Esteem for Childrenは、領域別にセルフエスティームを測定できる点において優れているものの、いずれも約60項目と多く、調査における回答者の負担などを考えるとその使用が困難な場合もあった。本自己肯定感尺度は、下位領域が設定されている上に項目数が比較的少ないという点において、青少年の危険行動との関係を検討するにあたって有用であると判断された。

### (2) 危険行動の防止における規範意識とセルフエスティームの重要性

本結果は、セルフエスティームは危険行動に関連する重要な要因であるという、

これまでの指摘を支持するものであった。また、性交経験など一部を除いて、危険行動は、特に親、教師、地域の人々に関するセルフエスティームが低いほど出現しやすいことがほぼ示された。しかし、彼らのセルフエスティームの状況は良好とは言い難く、危険行動の出現に関わって、憂慮された。

他方で、青少年の家庭や学校、地域に関する規範意識が低いほど、月喫煙、月飲酒、シンナー、シートベルト非着用、暴力行為といった法に関わるような行動が出現しやすいことがほぼ示された。加えて女子では、朝食摂取、やせ薬、性交経験、自殺願望などについても、同様の結果が示された。また、そうした関係はセルフエスティームよりも密接であることが示唆され、規範意識は危険行動の出現に共通しうる要因の一つとして注目すべきであると考えられた。

本研究では、社会や学校、家庭などのきまりやルールなどに対する一般的な規範意識を測定したが、もし、こうした規範意識を基盤として、「未成年は喫煙すべきでない」といったような危険行動に関する規範的な意識が形成されると考えるならば、青少年の危険行動を防止する上で規範意識は極めて重要なものであると言える。また、危険行動の出現には、家族や友人などの行動や態度、マスメディアといった社会的影響もまた大きく関係するが、規範意識が十分でない青少年は、危険行動を助長しうるそうした社会的影響をより受けやすいと考えられる。例えばHansenら<sup>14</sup>は、薬物乱用防止教育において、規範教育は拒否スキルトレーニングよりも効果が高いとしているが、社会的影響への対処において規範意識は大きく貢献するものであるのかもしれない。もしそうであるならば、危険行動を防止する上で規範意識を高める意義は、さらに大きいと言える。

## 5. 結論

青少年における危険行動を防止する上で、セルフエスティームとともに規範意識を重視する必要性が認められた。今後は、本結果で示された関係について、追跡調査を行いその因果関係を明らかにすることも課題となろう。

## 6. 引用文献

- (1) 野津有司, 渡邊正樹, 渡部基ほか: 日本の高校生における危険行動の実態および危険行動間の関連—日本青少年危険行動調査2001年の結果—. 学校保健研究 48: 430-447, 2006

- (2) Hansen WB, Graham JW: Preventing alcohol, marijuana, and cigarette use among adolescents: peer pressure resistance training versus establishing conservative norms. *Preventive Medicine* 20: 414-430, 1991